

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	乙	第	号
------	---	---	---	---

氏名 本田 亘

論文題目

Enteroscopic and radiologic diagnoses, treatment, and  
prognoses of small-bowel tumors

(小腸腫瘍の内視鏡的・放射線学的診断、治療および予後)

論文審査担当者

主査

名古屋大学教授

委員




委員

名古屋大学教授




委員

名古屋大学教授




指導教授

名古屋大学教授




## 論文審査の結果の要旨

小腸腫瘍は稀で、早期では症状に乏しいため発見が遅れることが多い疾患である。VCE と DBE の登場により小腸全体の内視鏡観察が可能となり、小腸疾患の診断能は飛躍的に向上した。本研究では、各検査の小腸腫瘍の診断能を比較するとともに、外科的あるいは内視鏡的治療についても評価した。

本研究では小腸腫瘍を認めた 159 人を対象とし検討した。VCE は全小腸を観察可能だが、小腸腫瘍の見落としが問題で、小腸腫瘍のスクリーニングは VCE と CT の組み合わせ検査が推奨されることが本研究により明らかになった。一方、DBE は組織学的診断、内視鏡治療および術前のマーキングが可能で小腸腫瘍の治療・予後ににおいて有用な検査であることも明らかになった。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 悪性リンパ腫は 159 例中 47 例、その内訳は濾胞性リンパ腫 29 例、びまん性大細胞性 B 細胞性リンパ腫 12 例、マルトリンパ腫 3 例、その他 3 例であった。検査契機は有症状例 21 例 (45%) に対し無症状 25 例 (55%) であった。有症状例は OGIB8 例、腹痛 8 例、イレウス 5 例であり、濾胞性リンパ腫は無症状である場合が多い。
2. 1995-1999年の本邦の報告では小腸悪性腫瘍を頻度別に集計すると、腺癌、悪性リンパ腫、GIST の順であったが本研究では悪性リンパ腫、GIST、転移性腫瘍、腺癌の順となっている。小腸原発悪性リンパ腫においても以前は、びまん性大細胞性B細胞性リンパ腫、マルトリンパ腫、T細胞性リンパ腫の順であったが本研究では濾胞性リンパ腫、びまん性大細胞性B細胞性リンパ腫、マルトリンパ腫の順であり、症状の少ない濾胞性リンパ腫の頻度が多い結果であった。
3. DBE の登場により最もマネージメントを変えたものとして Peutz-Jeghers 症候群が挙げられる。ポリープは過誤腫だが、胃、十二指腸、小腸、大腸のいずれのポリープも悪性化する可能性がある。臨床的に最も問題になる点は小腸ポリープの重積、出血で緊急手術を繰り返すことである。従来小腸ポリープは外科的手術でないと切除できなかつたが、DBE により全小腸のポリープが開腹せずに摘除できるようになった。今後は VCE 等で定期的に精査し必要であれば内視鏡下にポリープ摘除を行うことが必要であると考えられた。

本研究は、小腸腫瘍の診断と治療の進歩において重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	本田 亘
試験担当者	主査	石黒 邦彦	磯部 一郎	小寺 弘
	指導教授	後藤 義実		柳野 政人

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 小腸における悪性リンパ腫の頻度について
2. 小腸検査法の進歩に伴う小腸腫瘍診断について
3. DBEの登場による小腸腫瘍治療の変化について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員会議の上、合格と判断した。

別紙3

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第	号	氏名	本田 亘
学力審査 担当者	主査 旗部 健一 小寺 泰久 柳野 と人 指導教授 後藤 季実			
(学力審査の結果の要旨)				
名古屋大学学位規程第10条第3項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員会議の上判定した。				